

(前ページから続く)

います。人間にとって「一人ぼっちで、誰からも必要とされず、愛されていない」子とは、この上ない苦しみですが、私どもでは障害のある子どもたちが将来にわたって、社会の一員として生活できるように、療育面からのサポートを中心に、これからも支援活動を行なって行きたいと思えます。

貴グループの今後ますますのご発展とご活躍をお祈り申し上げます。

グループ わ 創設10周年に寄せて
(音文6期)湯口 澄比古

我々がカレッジ内に、グループわを結成してはや十年、月日と言う「百代の過客」(松尾芭蕉・奥の細道)の走り去るのが早いものよ、と言いたくなる。よくぞ各期の卒業生方も見事に組織化し発展させてきて頂いて、もう10年が来ました。

高齢化社会の到来が叫ばれて久しい。高齢者について語られるとき、いつもその問題点として語られていることは、介護、痴呆、寝たきり、生活保護と高齢者が無作為に纏められてめられて面倒を見て貰う、つまり扶養されていると言うイメージで語られている。

しかし本当にそうでしょうか。私たちは家庭に在っては家長として、地域にあっては長老として、その蓄えられた経験と叡智に対し、尊敬と敬慕の念を持って位置づけられているべしとの信念は未だ失ってはいないつもりだ。少なくとも我がグループわにある皆さん方はこのプライドは失っていない者達の集団である。そう思いませんか諸兄諸姉。

だからこそ再び学んで余生を少しでも社会の役に立つ存在となりたい、と思う人材の集い学ぶ学園、そして其処におのずと、社会還元センターわが生まれて来たのです。NPO法(特定非営利活動促進法)を政府が制定する前から、

我々はこの活動を始め、広く展開してきたことに誇りを持つてはありませんか。たしかに迫りくる人生の終焉は、私達に切ない別離の思いや、何かを遣り残したことへの未練に似た焦りを感じさせる。だからこそ老人と言う枠組みに囲い込まれることなく余生としてではなく、継続する人生として、第二の青春を夢を持って堂々と、残りの人生を豊かに充実させたい。そう願うのが今の我々の人生観であり、人生論でありたい。我々は昭和の激動の嵐を生き抜いて新世紀を迎えた。その「昭和人」としての気骨、気概。世界に日本を主張し、世界と戦い、敗れても奮起し日本を世界第二の経済大国とした「昭和」に生きた我々だ。

大和民族の皇紀二千六百年の悠久の歴史に名を留める「昭和時代」の青年達よ、二十一世紀に残され日々を、与えられた寿命を、有意義に全うしようではありませんか。そして、そのために志を立て入学してきた我々。見学の精神“ We are study again and its for another peoples ” 再び学んで他の為に」のもと、社会還元センターグループわの結成十周年を皆さんと心から祝いたいと思えます。これからも優れた人材が加入してきて、ますます組織内容の充実発展を期待して、お祝いの文を終わります。



季節の草花 ⑩

ナンバンギセル

生 8-文 久保 知彦

ハマウツボ科の一年生の寄生植物で、ススキ、サトウキビ、ミョウガなどの根に寄生する。せいぜい15センチ位の直立した茎に横向きにうす赤い色の花が咲く。

私がこの花にお目にかかったのは、カレッジ1年のとき、青垣町での学習の際だった。名前の由来は、その形がパイプ(西洋の煙管:南蛮人の煙管)に似ているからだという。

万葉集に

「道の辺の 尾花がもとの思い草
今さらになど ものか思はん」と歌われているようで、この「思い草」はナンバンギセルのことだといわれている。ススキの陰で慎ましく、小首を傾けてものを思っている佳人のイメージでしょうか。

葉緑体を持たないで、他の植物に寄生したり、腐葉土に生える植物はいくつもあるが、どれも小さくて目立たないものが多い。キンリョウソウもその一つで、白山のふもとの山中でお目にかかったときは、不思議な姿に感動した記憶がある。

